

豊穡の大地から CSAで築く幸せな農村の暮らし

(有)メノビレッジ長沼(空知管内長沼町)

アメリカやカナダで広まった、地域で支え合う農業のシステムCSA。その取り組みを学ぶべく、メノビレッジ長沼を訪ねた。

馬追山の麓にあるメノビレッジ長沼から、1台の車が走りだした。向かう先は長沼町内にある農家カフェの「こぐま座」。メノビレッジを運営するエップ・レイモンドさん(53)はみずからハンドルを握り、自家製パンの配達に回る。



「重量感のあるパンから、かわいらしいパンまで、メノビレッジで働く人の性格が表れ、味まで違うの。パンをじっくり見ると、

コムギからパンになっていく過程が想像でき、温かい気持ちになるんです。感謝しながらいただいています」

と、「こぐま座」を運営する小熊幸枝さん(50)が笑顔で話す。週に1度配達されるパンを、楽しみにしているようだ。

日本生まれ 北米育ちのCSA

メノビレッジ長沼は平成7年、札幌にあるメノナイト・キリスト教会の有志によって誕生。農業中心の共同体をめざし、日本でいち早くCSAを導入した農場として知られる。

CSAはCommunity Supported Agricultureの略で、「地域で支え合う農業」と訳される。同じ地域に住む農家と消費者が提携し、農畜産物を直接受け渡すシステムのこと。かかりつけの医者がいるように、会員に、懇意にする農家がいるようなイメージである。元は日本の産直連携をモデルにしたといわれており、現在アメリカやカナダのCSAは、千を超えるまでに広がったという。

メノビレッジ長沼の運営の中心であるレイモンドさん・荒谷明子さん(43)夫妻は、かつてアメリカ中南部でCSAに取り組んでいた。その後、新規就農者を積極的に受け入れる長沼町の環境に引かれ、この地に移り住んだ。

二人はこれまで、提携する消費者を地道に探し、農場の基盤を築いてきた。併せて、い

い土を将来にまで残したいと、有機農法での米や野菜作りに精進してきた。

現在提携する会員は、近隣の札幌市や江別市、北広島市を中心に約75人。会員を広い意味での家族と捉え、心を込めて農畜産物や加工品を作っている。

運営費は会員の会費によって賄われ、生産コストの合計額を会員数で割って会費を決める。支払った会員は5月から12月の初めまで、隔週で15回、野菜を受け取るというシステムだ。

「会員とつながっていると思うと、野菜作りに幸せを感じますね。地域でお金も回りますし。おいしく食べてくれる人たちのためにも、土づくりや野菜作りをていねいにやっています。こうって、みんな確認しています」

と、荒谷さん。現在はレイモンドさん夫妻の他に、新規就農をめざす2家族と研修中の若者ら9人のスタッフ、それにボランティアスタッフがいる。生産の喜びを感じながら、CSAの理念を共有しているのだ。

5年前からは野菜の配達に加え、収穫したコムギやライムギを自家製粉し、自家製パンも販売し始めた。生産から加工、直販までと、農家と消費者が共に食料を育て、分かち合う取り組みが続いている。

地域で経済が循環する ほんとうに幸せな暮らし

メノビレッジ長沼では平飼養鶏も営んでおり、鶏ふんや自家製籾殻くん炭などに、林の土から採取した土壌微生物を加えてボカシ肥を作っている。また、ライムギ畑の中にカボチャを植えたり、米ぬかで遮光して水田の除草をしたりと、伝統農法に学びながら、長沼の風土に合った有機農業を実践している。

今年からは、くずダイズの搾油を始めた。搾りかすは肥料やニワトリの飼料になる。ナタネも栽培し、景観を楽しみながら、油を搾って地域で経済を循環させる試みが加わった。

「栄養が循環する農業をすれば、自然にコストが下がります。大型トラクターの購入代金と同じ額の堆肥を入れれば土が軟らかくなり、中型トラクターでじゅうぶん耕せる」

と、レイモンドさんは小規模でも成り立つ農業を追求する。

近年は、地域活動にも力を入れている。農場には、区画を決めてオーナーになれる「みんなの田んぼ」や「おいらの田んぼ」がある。消費者を招いた田植えイベントでは、みんなで田植え唄を踊り歌って、餅つきや雑煮会もする。パンの販売をとおしてつながりが広がり、地域づくりの活動が本格化しつつある。

昨年、メノビレッジ長沼が中心になって、NPO法人「地域づくり実践教育センター エ





エップ・レイモンド&荒谷明子さん夫妻

義ではありません」

レイモンドさんは語気を強める。TPPのような不公平な仕組みではなく、地域内で経済を循環させていく道を提案していきたいという。

「経済性だけを追求し、大企業と競争しても勝ち目はありません。しかし、わたしたちには農地があり、製粉機や搾油機がある。農産物からパンや油まで作っている。お金持ちにはなれないけれど、安全・安心な生活ができます。土と向き合うことで、幸せな生活が築けるのです」

と、荒谷さんも続ける。

メノビレッジ長沼の誕生から18年。CSAの活動を軸にした多彩な実践には、豊かな地域づくりのヒントが詰まっている。

※メノビレッジ長沼のシステム～人件費や資材費、燃料代、車両費などの生産コストを会員数で割り、毎年5月上旬までに会費（運営費）として集める。分割払いも可能で、今年1軒当たり3万7,800円。「同じ地域に暮らす人たちが共に生きること」が理念なので、作柄の違いによる払い戻しや追加徴収はしない。5月から12月の初めまで、隔週で毎回8～15種類の旬の野菜や貯蔵野菜を提供する。

※(有)メノビレッジ長沼～借地を含む18haの農地で有機農業を営み、野菜や米やムギ類など、多品目を作る。平飼いの養鶏は約500羽。経営形態は有限会社となっている。野菜の受け渡し方法は、戸別配達(有料)、札幌市内にある7か所の配達ポストを使う(無料)、農場で受け取る(無料)の3つから選ぶ。

住所／夕張郡長沼町東6線北13号

☎ 0123-89-2385 FAX 0123-89-2400

HP <http://mennovillage.com/>

スカトン」が設立された。土づくりやTPP（環太平洋連携協定）などをテーマに学習会を続けている。道内の「TPPを考える市民の会」の事務局も引き受け、講演会や啓発を促す映画の上映会、ブックレット発行などに取り組んだ。

「TPPについては、国会議員も中身がわからないまま、秘密裏に交渉が進んでいます。国家から企業へ主権が移ろうとしている。これは民主主義